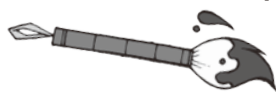


# 新・下野市風土記

## 「七五三と親の気持ち」



下野市教育委員会 文化財課

少子高齢化の時代と言われるようになってから、かなりの年数が経過しました。近年、市内小学校の新入生の数が減少していることを会議資料などで目に見ると、この言葉の意味を痛感します。休日に、しもつけ風土記の丘資料館の体験講座に小学生の兄弟と一緒に来た未就学児の小さなおさんが、兄弟と同じことをしたいのに上手くいかず泣いているのを見かけると、「この子たちが自分の年齢になる頃には、どんな世の中になっているんだろう」などと感慨にふけることもあります。

30年以上前の話になりますが、一緒に発掘現場で作業をしてくれた年配の方が、「子どもは他人の子であっても世間の子だから、世の中が育てていかなきゃダメなんだ」と言っていたことを思い出します。

今回は11月なので、七五三についてお話しします。七五三は文字が表すとおり、7歳、5歳、3歳の子どもの成長を祝う行事で、住んでいる地域の神社や寺院に「七五三詣で」を行い、子どもの成長への感謝や安全を祈願する行事です。

この行事がいつから始まったのか、その起源や由来については、いくつかの説があるようですが、主なものが2つあります。ひとつは15日という日を重視した説、もう1つは江戸時代前半の天和元年11月15日（西暦では1681年12月24日）に、上州館林城（群馬県館林市）城主の徳川綱吉の長男・徳松の成長や健康を祈って始まったという説です。最初の15日という日に重きを置く説では、旧暦の15日が二十八宿の鬼宿日（鬼が出歩かない日）とされていることから、万事、吉とされました。旧暦の11月は農事に関する収穫も終わり、実りを感謝する月でもありました。その月の15日に、氏神に収穫の御礼と子どもの成長への感謝を兼ねてお参りしたと言われていました。

3歳、5歳、7歳という年齢についても諸説あります。3歳は言葉、5歳は知恵、7歳は歯を神様から授かるという考えのほか、島根県（かつての出雲地方）では、奇数の年は子どもの厄年に相当するので神様に守ってもらう、というような考え方もあります。

これとは真逆で、奇数を縁起の良い数とする考え方もあります。関東地方の古くからの風習では、子どもは男女問わず3歳まで髪を剃る習俗があったため、数え年3歳（満年齢2歳になる年）になると「髪置き」（髪を剃るのを止める、卒業するといった意味）をしました。数え年5歳（満年齢4歳になる年）になると、男子は「袴着」（袴を着用する儀式）を行いました。これは、古くは平安時代、宮中の公家などの家格の人たちが男女ともに行った行事でしたが、江戸時代には武家の行事として男子のみの儀式となりました。数え年7歳（満年齢6歳になる年）になることは「帯解き（紐解き）」と呼び、これは女子が付け紐の着物から、大人と同じ幅広の帯を締めるようになることを指しました。

この他、近畿地方の習俗の「十三参り」における13歳という年齢設定や、福岡県方面では4～5歳で「ひもとぎ」、7歳で男子は「へこかき（ふんどし）」、女子は「ゆもじ（湯文字）かき」といった成人用の下着をつけるような風習もあったようです。

奇数の年齢に関する縁起の良し悪しの考え方は時代とともに変化しますが、時代が変わっても、親が子どもの無事を祈るのは変わらないということが、縄文時代の土偶や奈良時代の胞衣壺（出産後の胎盤とともに、男の子ならば出世を祈って筆と墨、女の子ならば良縁に恵まれるように鈔と針と糸を埋める習俗）などからもわかります。